

生のイネ科植物か前記の樹種と菌根をつくっていると 考えたいとしている。南方さんの菌は前記のように腐生生活をしていたと思われる。この点は日本発見の菌が果して日本産であるか或は輸入品であったのかということと共に、将来新しい資料が発見されてはじめて解明出来ることである。

文 献

Hadrianus Junius (1564): Fungorum genere in Hollandiae fabuletis passim crescentis descriptio et ad viuum expressa pictura. Ventenat (1817): Dissertation s. Phallus, in Mém. L'Inst. nat. Sc. et Arts 1: 517. Nees von Esenbeck: Das System der Pilze und Schwämme. Andersson, Olof (1950): Larger fungi on sandy grass heaths and sand dunes in Scandinavia, in Botaniska Notiser, Suppl. 2(2): 34-43.

○外来のアキノキリンソウ属植物と花粉症との関係(浅井康宏) Yasuhiro ASAI: The *Solidago* species thus far naturalized in Japan hardly cause pollinosis

Solidago 属の植物は主に北アメリカに分布し、100以上の種を有するとされている。しかし本属は多くの雑種をも含んだいわゆる Complex genus の一つで、分類学的に極めて複雑な要素をもち、従来これを *Euthamia* Nuttall, *Brachychaeta* Torrey et A. Gray, *Brintonia* Greene, *Oligoneuron* Small 等に細分する見方もある。

ところで米名を Golden-rod, Yellow-weed, Yellow-top とか呼ばれるこの仲間は、アメリカ合衆国を代表する National Emblem として一般に喧伝され、また Alabama, Kentucky あるいは Nebraska などの state flower ともされている。

筆者も従来、我国の帰化植物フロラ調査の一環として本属植物に興味をもって接してきたが、昨秋(1974)、北アメリカの各州やヨーロッパ各地で、原野などを一面に覆って黄金色の花穂を波うたせて生育し、あるいは栽培、逸出している状態を実見することができた。

一方、近年、我国の一部では、この仲間の広分布(帰化)と相まって、一般に Ragweed と呼ばれているブタクサ属 *Ambrosia* の諸種と同じく、いわゆる花粉症の原因植物としてクローズアップされ、関係諸方面からも問題視されている。しかしながら彼地では、その割に問題とされておらず、またこれを否定する記述(意見)が散見されるのも偽らざる事実である。

その理由として Golden-rod は、Ragweed とほとんど同時に開花し、より目立った存在であること。また繁殖力や分布力が旺盛で、しかも多年草であること。広い意味での雑草として一部で嫌われていること、などが禍しているのであって、この仲間

を pollinosis の原因植物と一概に決めつけるのは正鵠を欠く、誤った見解であるとしている。

このような考えを披歴する者、たとえば Steyermark, J. A. (1963) や Neal, M. C. (1965) らは、さらにこれに加えて *Solidago* 属の花粉が、*Ambrosia* 属のそれに比較し重いことや、元来が虫媒花であることなども挙げ、花粉症の原因植物としての存在意義を過少評価あるいは否定している。

そして本属のものが、いわゆる Hayfever plant として、彼地の花粉症罹患者等により悪評を受けているのは、単なる一般的風聞や誤った情報にもとづくものにすぎない、と結論している。すなわち花粉症患者が、*Solidago* 属植物に基因する鼻アレルギーであるといっている大部分のものは、これら植物の近くに生育する *Ambrosia* 属の花粉に由来するものであると言う。具体的には、たとえば Golden-rod の葉の上に近傍に生育する Ragweed の花粉が附着存在することがあり、これが混乱を来す実態であるとも述べている。

しかしその反面、北アメリカ各地のフロラを披見すると、多少とも本属植物がいわゆる Hayfever の原因となるとの記載がないわけではない。だがそれとて、きわめて消極的な記述（意見）にすぎぬようである。すなわち *Solidago* 属植物の花粉は、気候が非常に乾燥状態にあり、しかも風が強い日などには、大気中にも飛散することがあり得るとし、これが原因となって発症する可能性を稀に有するとしている (Frankton, C. (1955) ら)。

従って、全くこの仲間が広い意味での花粉症の原因とならないとは言えないまでも、ブタクサのそれと同一のランクで問題視するのは疑問であろう。

以上は昨年、筆者が欧米諸国の雑草フロラを現地で調査した折に得た諸資料にもとずき、その見解の一端を述べてみたものである。

よって現地の一部関係者の自国を代表する wild flower を弁護するための極端な考え方（意見）を紹介したことになるかも知れないが、その pollinosis の原因植物としての意義を考慮する場合の一資料となすに足るものと思われる。

なお頃日、我国の花粉症に関する優れた研究家であり、また特に臨床的な立場から本問題に関しても造詣が深い東京医科歯科大学の斎藤洋三博士に、その見解を訂したところ、上述の筆者の意見に対して同意を示されると共に、我国における外来の *Solidago* 属植物によるいわゆる pollinosis の存在は、完全に否定できないまでも、極めて懐疑的であるとの考えを披歴された。

一般に我国だけとは限らないが、純学問的に充分な調査、熟考を要する問題も、これが広く大衆に関連を有するようなものは、ことさらに事実以上に社会的アピールされがちである。従って、外来の *Solidago* 属による実害の程度（実態）についても、彼地の基礎的および臨床的データーをも充分参考にした上、もう一度原点にもどって

慎重な検討が望ましい。すなわち単に目立った存在（分布）や花粉量の多寡などの面のみから、植物学領域の研究者が、この仲間の Hayfever plant としての是否を論ずることは、彼地の関係者諸氏の言のように危険と言わざるを得ない。

あくまでも医学領域、特に耳鼻咽喉科学（鼻アレルギー疾患）関係者による本疾病に関する詳細な臨床医学的検討が行われ、我国自体での罹患者の実態が明らかにされることが先決と思われる。

因みに、太平洋洲のフロラに詳しいハワイ大学の St. John 博士によれば、北米合衆国の中でも最も日本に近いハワイ諸島には、本属の植物は自生しないが、しかし Tall Golden-rod の名で呼ばれ、我国でもなじみ深い *Solidago altissima* L. 一種のみが栽培あるいは逸出帰化している由である。

なお、その最初の記録は 1926 年であるとのこと、これは本種の我国への渡来時期 (Ornamental plant としての) と相通じ興味深い。

終りに、筆者の外来の *Solidago* 属植物の調査に際し、長年にわたり種々と御教示ならびに御援助いただいた東邦大学名誉教授久内清孝先生、東京大学名誉教授原寛博士を始めとする関係者各位、及び筆者の欧米における諸調査に当り、御助力下さったニューヨーク植物園主任研究官兼ニューヨーク市立大学教授小山鐵夫博士、ハワイ大学名誉教授 St. John 博士、また花粉症に関し臨床家の立場から有益な示唆を与えられた東京医科歯科大学耳鼻咽喉科学教室助教授斎藤洋三博士に対し厚く御礼申し上げます。

(東京歯科大学)

〇ツツジ類の自然交配種 (山崎 敬) Takasi YAMAZAKI: New natural hybrids of *Rhododendron* (§ Tsutsutsi) in Japan

日本にはツツジ類の多くの野生種があり、それらの間では交配しやすく、自然の中にも、人工的にもいくつかの交配種が知られている。人工交配のものは、いくつかの種類の交配が繰返されたりしているので、その起源をもとめることの困難なものが多いが、自然交配のものは、自生地附近の野生種と比較して、その両親を推定することが可能である。

自然交配種としての現在知られているものは、サツキとヤマツツジの交配種と思われるハンノウツツジ (*R. hannoense* Nakai), モチツツジとヤマツツジの交配種ミヤコツツジ (*R. tectum* Koidz.), モチツツジとキンツツジの交配種ムラサキリュウキュウツツジ (*R. hortense* Nakai) がある。最近つつじ栽培が盛んになるにつれ、いくつかの自然交配種が発見され、愛好家の間に広まりつつあるので、混乱の起らないうちに整理し記録しておきたいと思う。

宇連ツツジ 三河の低山地はツツジ類の変化の多い所で、ヤマツツジの一型である三河ツツジには、花色や花型がさまざまに変化したものが見られるし、ミヤコツツジ